

## II 基本層序

本遺跡では、地表面下約3mの深さで地山に達するが、今回の調査では基礎工事の浅深によってトレンチの調査深度も異なっている。調査地点の北側は、江戸時代の生活面が比較的良好に残っていたが、基礎が浅いため地山までの調査はおこなっていない。一方南側は、地山面までの調査をおこなったが、そのほとんどは江戸時代後期の整地土によって中世面まで削平されている状況が判明した。今回は、地山面まで調査したトレンチのデータをもとに旧地形の復原図を掲載する(図4)。

現時点では、詳細な層序の確定にはいたっていないが、基本的な層序は、地表から順に第1層(近・現代)、第2層(江戸時代後期)、第3・4層(江戸時代前・中期~室町時代後期:第3層は10YR5/2シルト、第4層は10YR3/2シルト質粘土)、地山である。地山上面では、後述する溝6が検出されている。この溝6が埋没し、整地土とみられる室町時代後期から江戸時代前期・中期にかけての堆積層(第3・4層がこれに該当する)がその上部に堆積する。調査地点の北側では、第3層上面で江戸時代前期・中期の炉および建物群が検出されている(図7)。なお、第2層は焼土と炭の混じる典型的な火災層で、現在のところ1730年(享保15年)に生じた火災に該当する可能性を考えている。第2層の堆積状況は調査箇所によって異なり、整地層をはさんで二層に分けることも可能である。今後、出土遺物の様相などもふまえて、詳細な検討を進める予定である。

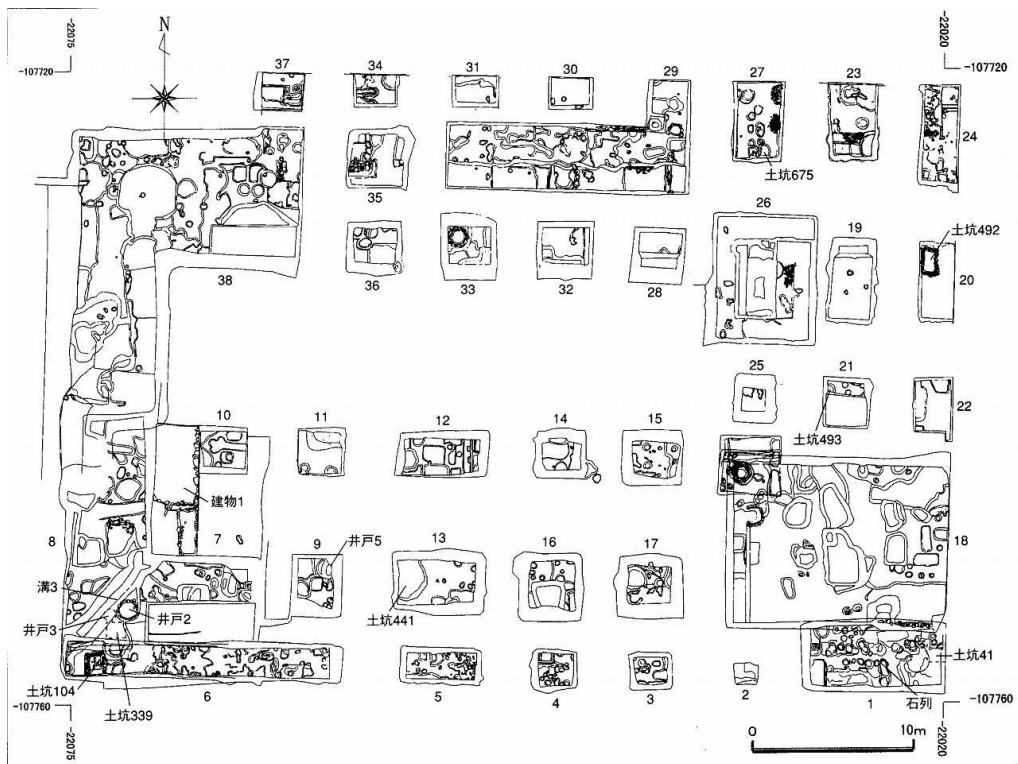


図3 最終調査面一覧(数字はトレンチ番号、そのほかは主な遺構番号)

図3 最終調査面一覧

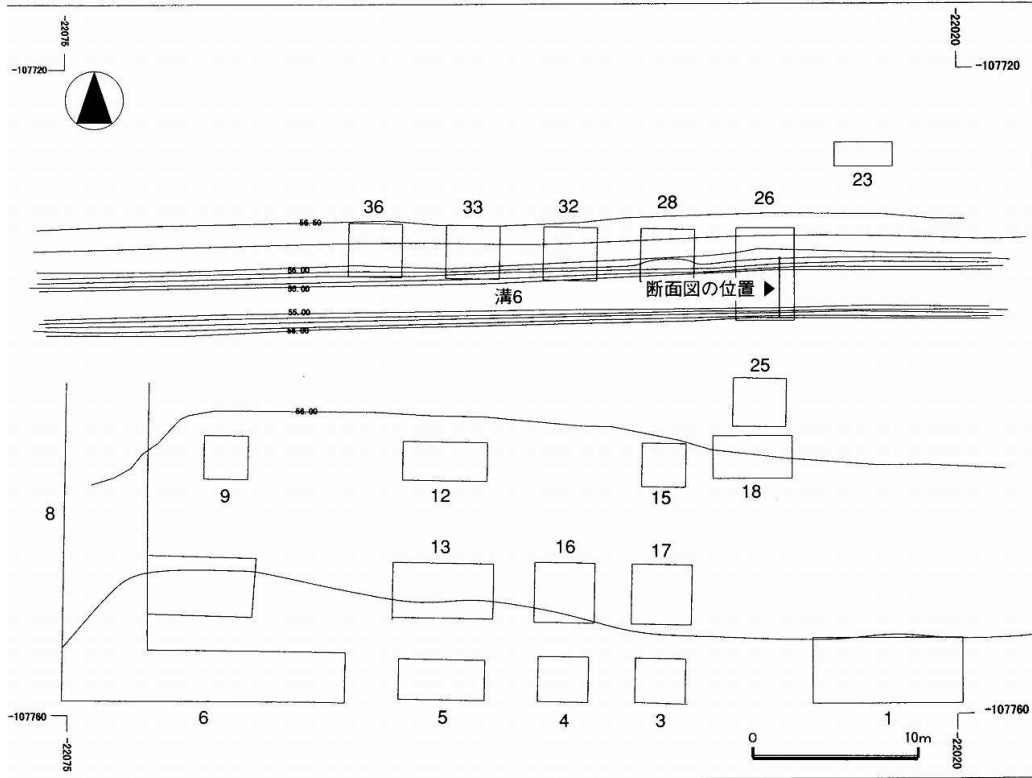


図4 旧地形復元図  
(数字は地山面まで調査をおこなったトレンチ、コンターは25cm間隔)

図4 旧地系復元図

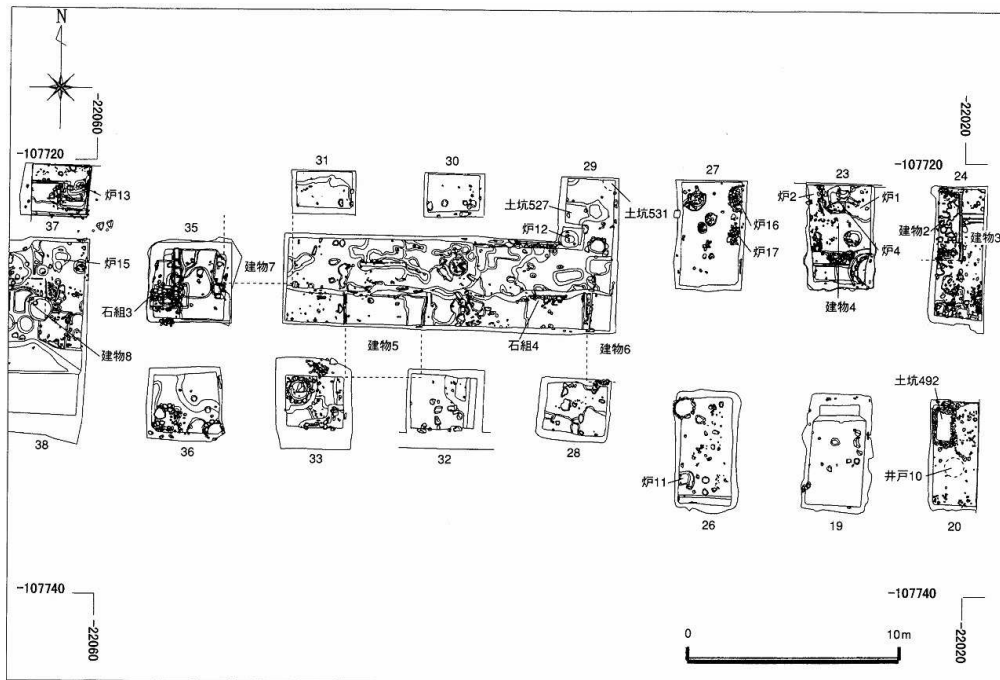


図7 鏡作り工房群 (第3層上面で検出された遺構群、土坑531のみ2層上面) 1/200

図7 鏡作り工房群